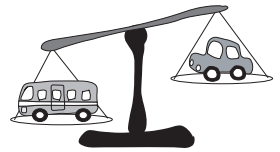


クルマと暮らし



かしこい Vol.10
クルマの使い方

藤井 聡

「かしこいクルマの使い方」も、今回で最終回。今までクルマのいろいろな面について考えてきましたが、今回は改めて、クルマと私たちの暮らし全般について考えてみたいと思います。

「クルマが環境に悪い」ことは、しばしば耳にします。排気ガスは、大気汚染や地球環境の問題ともつながっています。もちろん、これらはとても重要な問題ではありますが、「大気」や「地球」というスケールの事柄は、日常生活の中では、正直、あまりピンとくるものでないかもしれません。

しかし、じっくり考えてみれば、クルマの問題はそういう「大きなスケール」の問題「だけではないようです。クルマにばかり乗っていると、「歩く」ことが少なくなると、「健康な生活」が少しづつ阻まれてしまいます。クルマばかりに乗っていると、お洋服に気をつかわずに出かける回数が、ついつい増えてしまいます。クルマにばかり乗っ

ていると、鳥や虫の声や、季節の移り変わりや花の香りを感じる機会が少なくなってしまう。クルマばかり使っていると、知らず知らずのうちに、道路は渋滞し、バスや電車など「みんなの交通手段」は姿を消していきます。そして結局は、長い年月を経て「街のたたずまい」は、昔とは似ても似つかない殺風景なものに様変わりしてしまいかも知れません。

もちろん、これらは全て、今日、あなた一人がクルマに乗ったから生じる、というようなものではありません。しかし、「少しづつ」、そして、「確実に」生じてしまう問題でもあるのです。

クルマほど便利な手段は、今のところどこにも無いでしょう。でも、その便利さを追い求めているうちに、かえって豊かな暮らしがむしろ失われていることがあるとしたら？。クルマと「かしこく」お付き合いしていくために、時には、日々の暮らしを振り返ってみることも、いいことなのかもしれませんね。

藤井聡（ふじい さとし）

東京工業大学教授。1968年奈良県生、京都大学卒業。フジテレビ「交通バラエティ・日本の歩き方」2003～2004年を監修。JAFMATE「交通百葉箱」2001～2002年に連載。主著「社会的ジレンマの処方箋」



バスでまちづくり

世界バス紀行

中村 文彦

いよいよ最終回となりました。拙著「バスでまちづくり」(学芸出版社より好評発売中)の題名そのままの

タイトルで失礼します。バスが走ることで自分を嬉しく思ってくれる市民の方々も多いかと存じますが、バスが走ることによって、まちが、ひとが、変わっていくということはもっとすてきなことだと思います。写真はアメリカのデンバーという街のバスです。中心市街地の一番目抜き通り1600mの区間だけを往復します。この目抜き通りは、歩行者とバス(と観光馬車)しか走りません。20年ほど前ですが、このバスの運行にあわ

せて通りのデザインを一新しました。

おもしろいのは、お金にまつわる話です。このバスは運賃が無料です。ただほど怖いものはない、というのが世の常ですが、このバスの車両の費用、人件費もろもろは、沿道が中心となって負担しています。自分たちの商店街の中の移動を支援し、自分たちの商店街を元気にしてくれるバスだからです。商店街の両端にはバスターミナルがあるので、市内随所からこの商店街に来ることができ、商店街の中で時間をすごせます。

運賃無料のバスなので車両も独特です。運転士さんの眼前で運賃を払う必要はなく、ドアも客室も前輪の後ろにだけあります。エンジンは前にあり、結果として、車内はフルノンステップです。みんな短時間利用なので椅子は多くはありません。百数十メートルおきの交差点の手前で必ず停車し、信号を一巡待って発車するので、「次ぎとまります」ボタンもありません。ドアが開いたら降りればよい、それだけです。もちろん2～3分おきに来るので、あまり待ちません。もう20年近く前のことですが、このバスを核とした中心市街地の再整備で、デンバーはとっても元気になりました。

このように公共交通だけが走行できる、歩行者を主役とした商店街をトランジットモールと呼びますが、このデンバーのトランジットモールは、バスのシステムという点では世界でトップレベルです。こんなに大規模でなくても、バスにはいくつものまちづくりのヒントがあるのだと思います。



中村 文彦 (なかむら ふみひこ) 横浜国立大学大学院工学研究院教授。東京大学卒業。専門は都市計画、都市交通計画、公共交通政策など